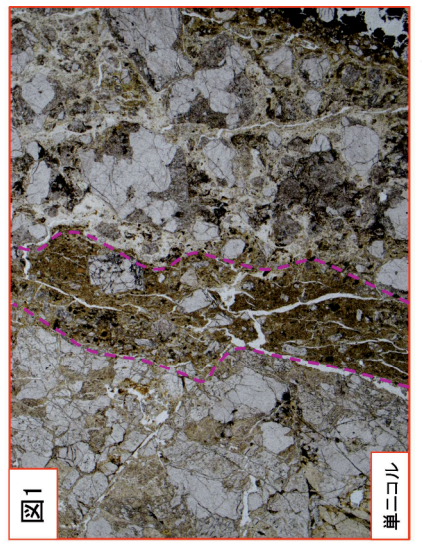
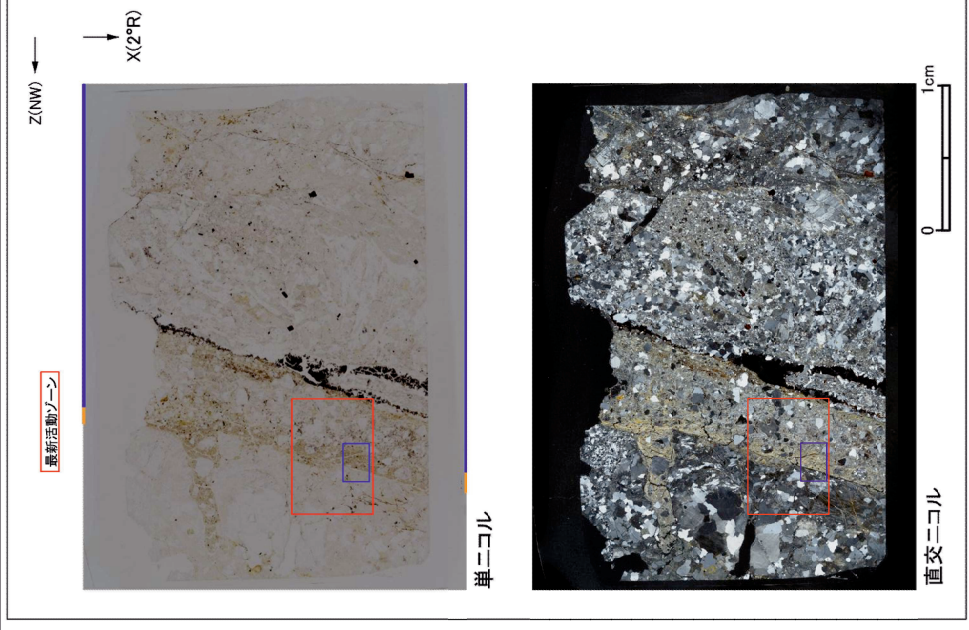
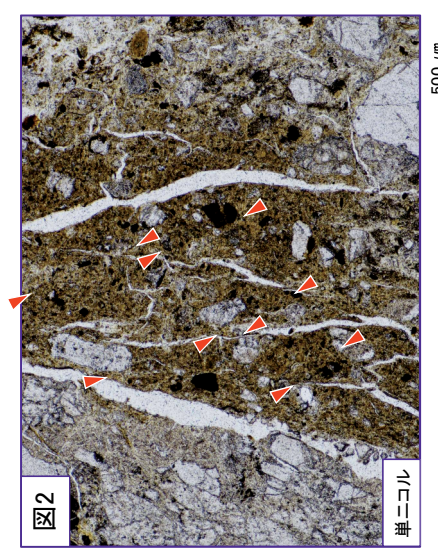


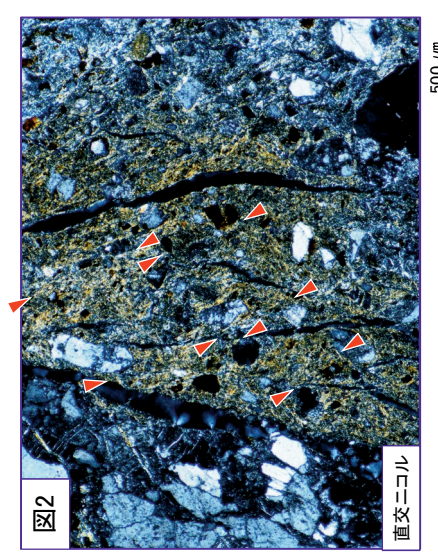
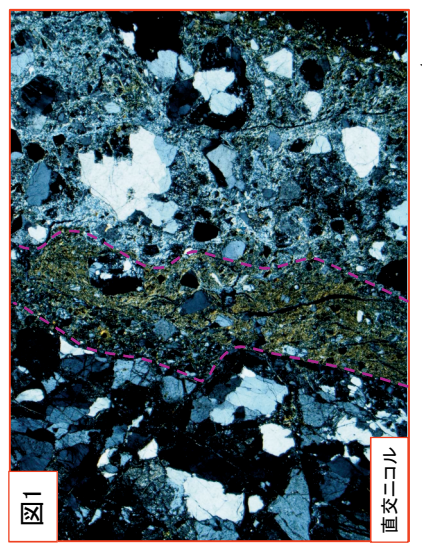
- ・最新活動ゾーンには、以下の特徴が認められる。
- 基質は粘土鉱物を主体とする。(図1, 2)
- 粘土状部の分布は帯状で直線的である。(図1)
- せん断構造に伴う粘土鉱物の定向配列が認められる。(図2)
- 岩片は少ない。(図2)
- 丸みを帯びている岩片が多い。(図2)



破線は粘土状部の分布範囲を示す



赤三角は粘土鉱物の定向配列を示す



凡例  
 断層カウジ  
 カタクレーサイト

(肉眼観察結果 深度22.41m)

- 深度22.41mにはフィルム状の細粒部が挟在している。幅が狭いため、肉眼観察では原岩組織が認められる岩片を主体とし基質も細粒化した岩片からなる組織の有無を把握できなかったが、細粒部の連続性及び直線性が良いことから断層ガウジとして扱うこととした。

(観察位置)

- 薄片試料は、肉眼観察により認定した断層面 $\alpha$ に沿って最も細粒化した部分を含み、人為的な試料の乱れの無い部分で作製した。

※断層面 $\alpha$ は最新活動面

(薄片観察結果)

- 薄片観察では、以下の通り断層ガウジの特徴が認められた。
  - セン断構造に伴う粘土鉱物の定向配列が認められる。
  - 基質は粘土鉱物を主体とする。
  - 粘土状部の分布は帯状で直線的である。
  - 丸みを帯びている岩片が多い。
- 薄片観察では、カタクレーサイトの特徴が認められなかった。

以上より、薄片観察結果では、最新活動ゾーンの細粒部を断層ガウジであると判断した。



(総合評価)

当該破砕部については、以下の理由から断層ガウジであると評価した。

- 肉眼観察で確認されたフィルム状の細粒部は、原岩組織の有無が判断できないことから断層ガウジとして扱うこととした。
- 薄片観察で確認された最新活動ゾーンの細粒部は、その特徴から断層ガウジであると判断した。

断層ガウジ・ 断層角礫の有無	断層ガウジ・ 断層角礫の幅[cm] *	明瞭なせん断構造・ 変形構造 *
有	フィルム状	無

\*: 断層岩区分の総合評価で断層ガウジ・断層角礫の有無が「有」の場合は肉眼観察結果を記載。

断層岩区分の総合評価で断層ガウジ・断層角礫の有無が「無」の場合は「一」と記載して括弧内に肉眼観察結果を記載。

・深度37.86～37.91mの「粘土混じり礫状」と記載の箇所については、やや軟質であるが、含まれる細粒部は局所的に分布し、連続性及び直線性に乏しく、原岩組織が認められる岩片からなる組織も認められる。これらのことから変質した力タクレーサイトであると判断した。

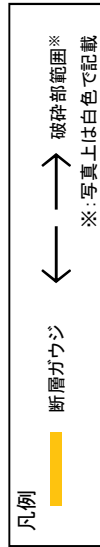
・一方、深度37.86mには細粒部を挟んでいる。細粒部は軟質で、連続性及び直線性が良く、原岩組織が認められる岩片を主体とし、基質も細粒化した岩片からなる組織も認められない。これらのことから断層ガウジであると判断した。

・また、深度37.91mには灰白色粘土を挟んでいる。粘土は軟質で、連続性にやや欠けるが、直線的であり、原岩組織が認められる岩片を主体とし、基質も細粒化した岩片からなる組織も認められない。これらのことから断層ガウジとして扱うこととした。

ボーリング柱状図

● 37.86～37.91m：破砕部  
 37.86～37.91m：粘土混じり礫状部 (Hj)  
 上端30°，下端35°で、幅40mm。褐色を呈し、下端側に幅1～2mmの灰白色粘土を伴う。上端側にも幅数mmの細粒部を挟む。

コア写真



青枠部拡大

・薄片は断層面  $\beta$  及び細粒化が進んだ範囲を含むように作製した。

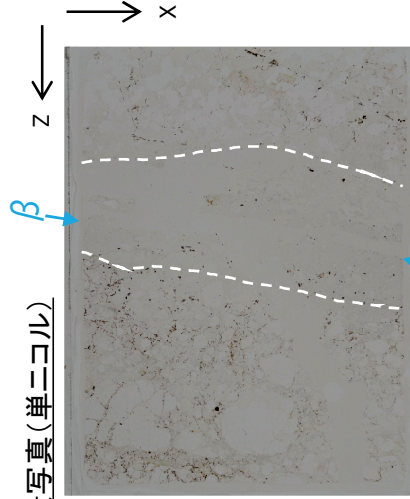
コア写真



※断層面  $\beta$  は最新活動面

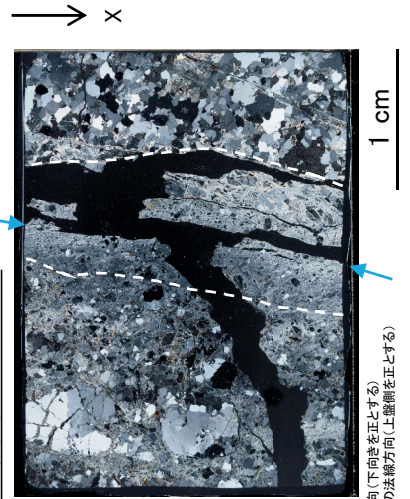


薄片全景写真(単ニコル)



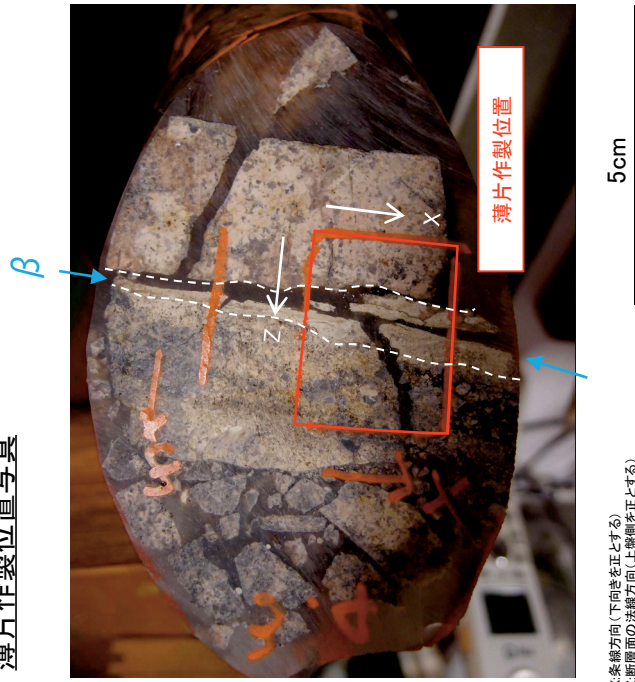
X: 条線方向(下向きを正とする)  
Z: 断層面の法線方向(上盤側を正とする)

薄片全景写真(直交ニコル)



X: 条線方向(下向きを正とする)  
Z: 断層面の法線方向(上盤側を正とする)

薄片作製位置写真

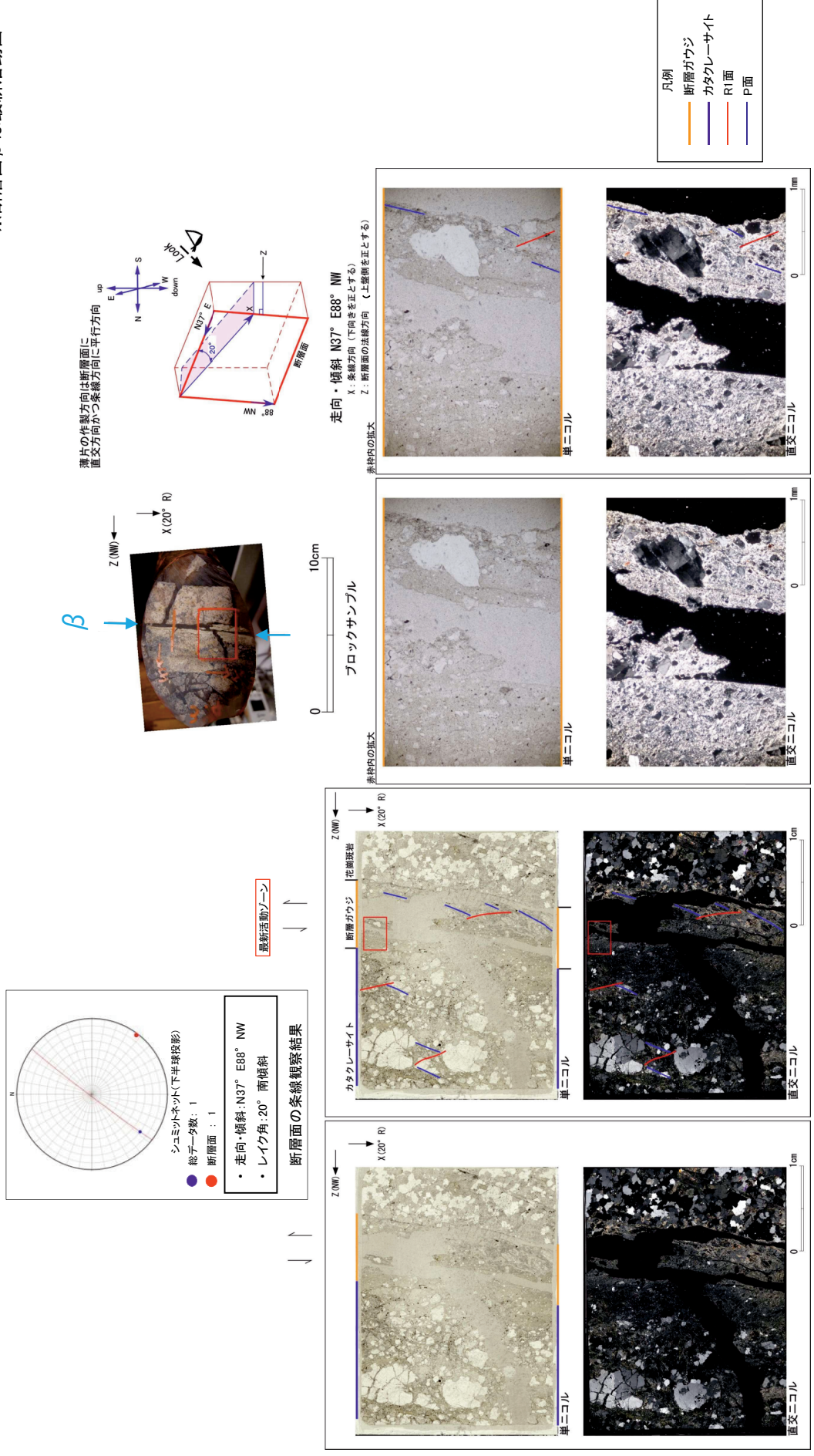


X: 条線方向(下向きを正とする)  
Z: 断層面の法線方向(上盤側を正とする)



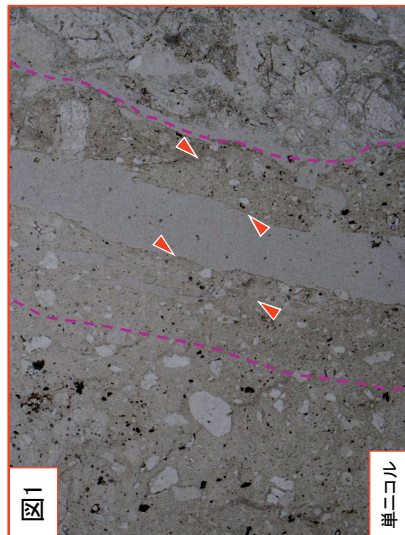
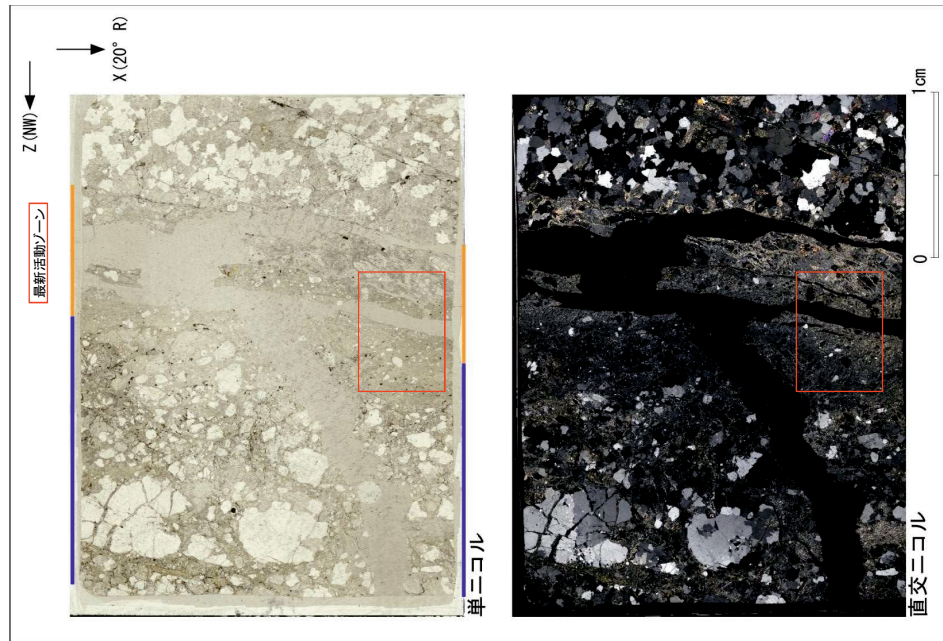
- ・H24-B14-1のボーリングコアから採取した薄片試料の観察結果によれば最新活動ゾーンの変位センスは、左ずれ成分が卓越する。
- ・最新活動ゾーンに以下の特徴が認められることから、断層ガウジと判断した。
  - (断層ガウジ)粘土状部の分布は帯状で直線的かつ連続的である。
  - (断層ガウジ)基質は粘土鉱物を主体とする。
  - (断層ガウジ)せん断構造に伴う粘土鉱物の定向配列が認められる。
  - 岩片は少ない。

※断層面  $\beta$  は最新活動面

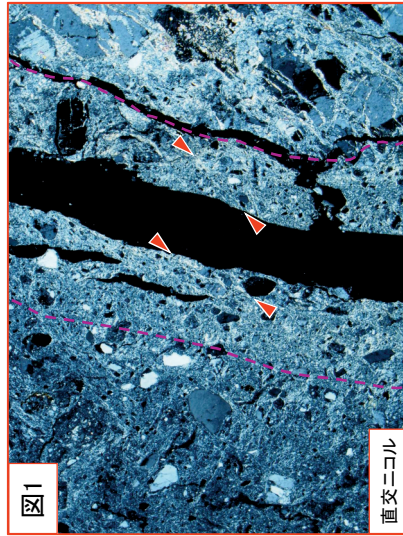


第7.4.4.356図 (3) 破碎部性状 H24-B14-1 深度37.86~37.91m (変位センス, 薄片観察による断層岩区分(1/2))

- ・最新活動ゾーンには、以下の特徴が認められる。
- 粘土状部の分布は帯状で直線的かつ連続的である。(図1)
- 基質は粘土鉱物を主体とする。(図1)
- せん断構造に伴う粘土鉱物の定向配列が認められる。(図1)
- 岩片は少ない。(図1)



破線は粘土状部の分布を示す  
赤三角は粘土鉱物の定向配列を示す



(肉眼観察結果 深度37.91m)

- 深度37.91mには灰白色粘土を挟在している。粘土は軟質で、連続性にやや欠けるが、直線的であり、原岩組織が認められる岩片を主体とし基質も細粒化した岩片からなる組織も認められない。これらのことから断層ガウジとして扱うこととした。

(観察位置)

- 薄片試料は、肉眼観察により認定した断層面βに沿って最も細粒化した部分を含み、人為的な試料の乱れの無い部分で作製した。

※断層面βは最新活動面

(薄片観察結果)

- 薄片観察では、以下の通り断層ガウジの特徴が認められた。
  - 粘土状部の分布は帯状で直線的かつ連続的である。
  - 基質は粘土鉱物を主体とする。
  - せん断構造に伴う粘土鉱物の定向配列が認められる。
- 薄片観察では、カタクレーサイトの特徴が認められなかった。

以上より、薄片観察結果では、最新活動ゾーンの細粒部を断層ガウジであると判断した。



(総合評価)

当該破砕部については、以下の理由から断層ガウジであると評価した。

- 肉眼観察で確認された灰白色粘土は、その特徴から断層ガウジとして扱うこととした。
- 薄片観察で確認された最新活動ゾーンの細粒部は、その特徴から断層ガウジであると判断した。

断層ガウジ・断層角礫の有無	断層ガウジ・断層角礫の幅[cm] *	明瞭なせん断構造・変形構造 *
有	0.4	無

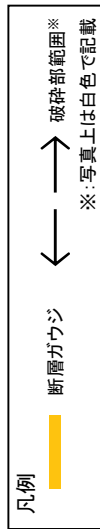
\*:断層岩区分の総合評価で断層ガウジ・断層角礫の有無が「有」の場合は肉眼観察結果を記載。断層岩区分の総合評価で断層ガウジ・断層角礫の有無が「無」の場合は「-」と記載して括弧内に肉眼観察結果を記載。

- ・深度42.62～42.82mの「粘土混じり礫状」と記載の箇所については、硬質で、含まれる細粒部は局所的に分布し、連続性及び直線性に乏しく、原岩組織が認められる岩片を主体とし基質も細粒化した岩片からなる組織も認められる。これらのことからカタクレーサイトであると判断した。
- ・深度42.82～42.88mの「砂混じり粘土状」と記載の箇所については、やや軟質で、細粒部の連続性及び直線性が良く、原岩組織が認められる岩片を主体とし基質も細粒化した岩片からなる組織も認められない。これらのことから断層ガウジであると判断した。
- ・深度42.88mには灰白色粘土を挟んでいる。粘土はやや軟質で、細粒部の連続性及び直線性が良く、原岩組織が認められる岩片を主体とし基質も細粒化した岩片からなる組織も認められない。これらのことから断層ガウジであると判断した。

### ボーリング柱状図

- 42.62～42.88m：破砕部  
上下端とも45°程度の傾斜をなす。
- 42.62～42.82m：粘土混じり礫状部（Hb）  
上端45°で直線的、下端48°で不明瞭。灰白色を呈する。
- 42.82～42.88m：砂混じり粘土状部（Hc-2）  
上端48°で不明瞭、下端45°で直線的。やや軟質。原岩組織は認められない。灰白色を呈する。下端に幅1～8mmの灰白色粘土を挟む。

### コア写真



灰白色粘土の連続性・直線性が良い



青梓部拡大



・薄片は断層面  $\alpha$  及び細粒化が進んだ範囲を含むように作製した。

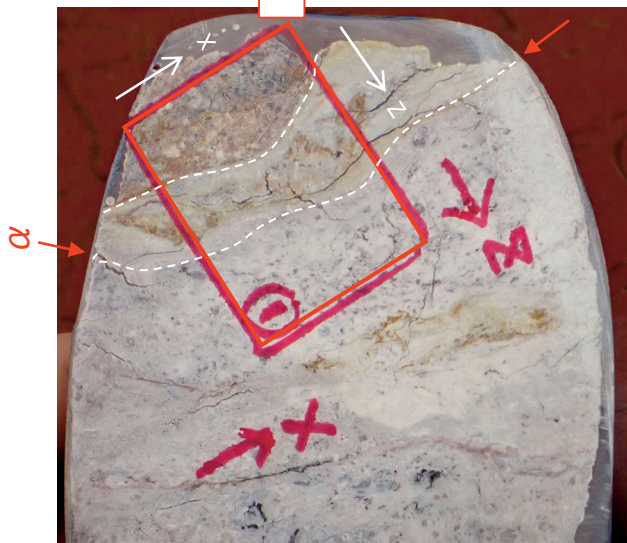
コア写真

※断層面  $\alpha$  は最新活動面



※断層面  $\alpha$  は最新活動面

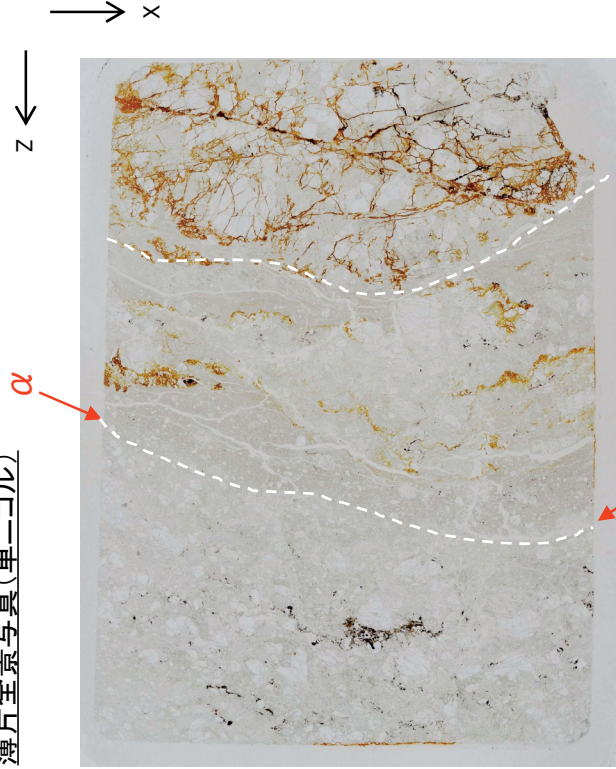
薄片作製位置写真



X:条線方向(下向きを正とする)  
Z:断層面の法線方向(上盤側を正とする)

5cm

薄片全景写真(単ニコル)



X:条線方向(下向きを正とする)  
Z:断層面の法線方向(上盤側を正とする)

1 cm

